

「靜邊城、本契丹二十部族水草地、北隣羽厥……東南至上京一千五百里」と記し、また同志に「泰州德昌軍節度、本契丹二十部族放牧之地」と見ゆれば、此の城は遼の泰州の地にして、今の東蒙古郭爾羅斯部前旗の西境に當り、嫩江と松花江との合流地點の西に近き地なり（蒙古游牧記卷一、郭爾羅斯部の條及、
び滿洲歴史地理第二卷八六頁參照）、而して此の地は東南上京を去ること一千五百里といへば河董城との距離は相近く、僅かに西北（靜邊城より）二百里に過ぎず。従つて此の河董城なるものは、大金國志に記せるが如き、雲中の北方約三千餘里、沙漠無人の境を距てたる所とは認むべきに非れば、大石の至りし可敦城は、金の鎮州たる可敦城ならざる可らず。而して此の鎮州が今の何處に相當するかに就いては沈垚既に其の西遊記金山以東釋地に於て之を考がへ、以て吾悞謁腦兒ウゲルノール正西の地となせり。蓋し長春真人の西遊記に、ケルレン河を離れてより、西に行くこと十日にして「漸見大山峭拔、從此以西、漸有山阜、人烟頗衆、……又四程西北渡河、乃平野、其旁山川皆秀麗、水草且豐美、東西有故城、基趾若新、街衢巷陌可辨、制作類中州、歲月無碑刻可考、或云契丹所建、既而地中得古瓦、上有契丹字、蓋遼亡、士馬不降者、西行所建城邑也」とあると、また張德輝の邊墩紀行に「自黑山之陽、西南行九驛、復臨一河、北語云渾獨刺、漢言兔兒也、遵河而西行一驛、有契丹所築故城、城方三里、背山面水、自是水北流矣、自故城西北行三驛、過畢兒紇都、乃工匠積養之地、又經一驛、過大澤泊、周廣約六七十里、水極激徹、北語謂吾悞謁腦兒、……泊之正西有小故城、亦契丹所築也」と記せるとによりて長春真人の見たる東西の故城と、張德輝の見たる兩故城とは共に契丹の築ける所にして、同一のものなりと考がへ、前者の所謂西の故城は後者の所謂「泊之正西有小故城」にして、即ち吾悞謁腦兒の正西に位せるものなりとし、而して此の地は遼史地理志に鎮州の位置を記して遼の上京に至るに東南の方三千餘里とせる道里と相合するを